
ファーストキスはタバコ味

ウメ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファーストキスはタバコ味

【Nコード】

N3370D

【作者名】

ウメ子

【あらすじ】

放課後の学校に私が残っている理由は……。

薄暗くなった放課後の学校には、部活に励んだり、勉強をしたりと目的があつて残っている生徒しかいなかった。そんな教室に、私は一人で残っていた。もちろん目的があつて……。

私は隣の席に目を向けた。私の隣の席には鞆が一つ残されていた。私の隣の席の男は、学校で一番の問題児とされている、いわゆる不良と呼ばれている男だ。彼は今の若者の中では珍しく、女に興味がないらしい。いつも不良仲間と一緒に誰も近づこうとはしない。そんな硬派な彼に密かな恋心を抱いている生徒は多い。私には理解が出来ないが、私の友達いわく、顔も良く硬派な男は女心をくすぐるらしい。

「こんな男のどこがいいんだか……」

ため息をつきながら一人呟く。もう一度、隣の席を見ると私はポツンと残された鞆を持って屋上へと向かった。廊下を歩いてみて気付いたが、もう校内に残っている生徒はいないのか、ひっそりとしていた。グラウンドからは、野球部の掛け声が遠く聞こえてくる。その声を聴きながら歩いていった。

「もう、何で私がこんなコトしないといけないのよ。ほとんど人もいないし」

私の目的、それは彼を更生させるコト。なぜそんなコトになったのかというと、私はこの学校の生徒会長で、彼に唯一文句を言える女だから。そのため、教師の必死の願いを渋々受けるコトになっ

ただ。屋上の扉の前に着き、扉を開けた。普段は閉められているのだが、なぜか開いていた。理由は分かっている。彼がどこで仕入れたのか知らないが、合鍵を持っているのだ。屋上に出ると、彼が寝転がっているのが見えた。彼の頭上では煙が立ち昇っている。

「ちょっと、何してるのよ。あんた未成年でしょ。しかも、また勝手に屋上に忍び込んでるし」

私の声を聞いて彼はタバコを啜えながらこちらを振り向いた。

「俺の癒しなんだよ。これがなかったら、何か口寂しいんだよなあ。ここも気に入ってるし。お前が来なかったら、最高なんだけどなあ。お前も暇なんだな」

彼はそう言いながらゆっくり座った。私は何でこんな奴の相手をしてはいけないのかと思うと腹が立った。

「私だって来たくないわよ。それに、あんた合鍵持ってんでしょ？何回取り上げても来てるし……来てほしくないなら鍵かけときなさいよ」

そう言うてから、彼に持ってきた鞆を投げつけ、彼に背を向けて帰ろうとした。すると彼が声をかけた。

「そんなに怒るなよ、鞆ありがとな。あと、ちょっと嘘ついた」

「嘘？どれが嘘なのよ？」

彼の言葉が何となく気になった私は彼を見た。すると、彼が手招きをして私を呼んだ。私は何だろうと思って彼のほうへと歩いた。

彼は自分の座っている隣と手でポンポンとしていた。座れというコトだろう。何だろうかと思ったが、とりあえず座ってみた。

「で？何が嘘？」

私がそう言うと、彼はうぐんと言いなながらタバコの火を消した。そして、私の質問を無視して話し出す。

「お前さ、俺を更生つての？させるんだろ」

「先生に頼まれたからね、不本意だけどそのつもりよ」

「生徒会長さんは大変だねえ」

「何、他人事みたいに言ってるのよ。大変だって思うならこういうのやめてくれる？」

「ん〜……やだ」

普段見ている彼と違う口調で話しているコトに驚きながらも、そんなコトは顔に出さずに言った。

「やだつて……なに子供みたいなコト言ってるのよ」

それだけ言うと、彼は再びタバコを取り出した。私は素早くタバコライターを奪い取った。

「あつ何すんだよ」

彼は眉間に皺を寄せて言った。

「だから、未成年でしょ。大体、私の質問に答えてないし」

「四捨五入したら二十歳だよ。質問って何だっけ？」

「四捨五入しないで。嘘って何？って聞いたでしょ」

彼は、ああという顔を見ると笑った……というより、優しく微笑んだ。そんな彼の顔を沈みかける夕日が照らしていて、彼に一瞬ドキツとした。彼は、普段と違う優しい声で話した。

「だってさ、俺が更生したらお前も来ねえだろ？」

「まあ、そうね」

「俺、本当はお前に来てほしいもん。だから鞆もわざと教室に置いてきたし、屋上の鍵も開けといたし」

彼の言いたいコトがよく分からなかった。私分からないという顔をしていると、彼は困った顔をした。

「お前さ、ここまで言われて気付かねえの？」

「は？何が？」

「ああ、もう。だから、お前が好きなんだって」

一瞬、私の中で時間が止まった。少しして我に返り、顔を赤くしながら叫んだ。

「ええ〜！あんだ、女に興味ないんでしょ？何で私なのよ！」

「興味ないって……。んなわけねえよ。ああ〜でも、お前にしか興味ないな」

「だから何で？」

私がそう言うと、彼は私の手を取り自分のほうに引き寄せた。私は彼に抱きしめられる形となった。私は自分の心臓の音を聴きながら、動けないでいた。彼は私を抱きしめたまま話す。

「お前は俺のコト何とも思ってたねえみたいだけど、俺は好きだから」
彼にそう言われて、私はなぜか心臓がさつきよりドキドキしていると感じていた。私は思わず彼に聞いた。

「あのお、私いますごく心臓がドキドキしてるんだけど……何で？」
彼は少し驚いた顔をしたが、すぐに嬉しそうな顔になって私に答えた。

「お前は自分の気持ちにも鈍いのかよ。それってさ、俺のコト好きってコトなんじゃねえの」

「えっそうなの？……不本意だわ」

何でだよと言いながら、彼は私に顔を近づけた。そしてゆっくりと私にキスをした。私は今までで一番ドキドキして心臓が壊れてしまっんじゃないかと思った。

「何するのよ、すぐドキドキしちゃったじゃない」

「私が彼から視線を離しながら言うと、彼はまた私を抱きしめた。」

「嫌じゃなかったんだ。やっぱり俺、お前が好きだわ」

彼に好きだと言われて嬉しいと思った。そして、今度は私から彼にキスをした。彼は今日何度目かの驚いた顔をしていた。私はさっきから感じていたコトを彼に聞いてみた。

「ねえ、私キスするの初めてなんだけど、キスってこんなに苦いの？」

「ああ、もしかしてこれかな？」

そうやって彼はタバコを指差した。タバコってこんなに苦いんだと思い、私は彼を更生させる一つの作戦を思いついた。

「こんなに苦いキス嫌だから、タバコ止めてね」

彼はええと不満そうに言った。私は立ち上がって彼に笑顔を向けた。

「ダメよ、吸ったらもうキスしないから。更生してもらわないとね……それに、もう更生させるって理由がなくても一緒にいれるでしょ？」

私の言葉を聞いて彼は嬉しそうにそうだなと言うと、私の手を取り屋上の扉に向かって歩き出した。

E
N
D

(後書き)

連載のほうは細かいところを直している最中で、なかなか執筆できていません。すみません(+ | +)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3370d/>

ファーストキスはタバコ味

2010年10月10日12時07分発行